

## 宮本 輝 「こうもり」論

藤 村 猛

### 要 旨

宮本輝の「こうもり」は、語り手「私」の高校時代の友人・ランドウとの冒険と、現在の不倫相手・洋子との出来事が描かれている。偶然、ランドウの死を知った「私」は、彼との冒険を思い出す。二人は「気色の悪い街」〈鶴町〉に行き、ランドウの恋人（女子高校生）と会う。「私」は二人を待っていたが、上空に乱舞するこうもりを見て逃げ出す。続いて、洋子とのことが語られ、詩仙堂で彼女を待っている間に、かつての〈鶴町〉が再現し、「私」の内部から〈こうもり〉が噴き出す。

この作品は、〈鶴町〉の迷宮を背景にして、〈こうもり〉の登場によって、主人公たちの不安やおびえ（その果てには死）、また性（快楽）の共存を浮かびあがらせる。だが、〈こうもり〉が罪や性欲の象徴となつていても、〈こうもり〉と恋愛（また登場人物たち）との関係が弱く、「宿命」レベルにまで至っていない、と論じた。

### キーワード

こうもり・鶴町・ランドウ・死・性

### 一 はじめに

宮本輝「こうもり」(『オール讀物』昭和53年12月)は、「螢川」(『文芸展望』昭和52年10月)や「幻の光」(『新潮』昭和53年8月)の後に発表された短編である。作品の主人公は「私(コンスケ・耕助)」であり、副主人公格として、高校の同級生「ランドウ」(山田欄堂)<sup>(1)</sup>と「私」の現在の不倫相手「洋子」がいる。

作品(三章)は、現在(一章)―過去(二章)―現在(三章)という構成であり、二種類の物語―ランドウとの物語・洋子との物語―が「私(コンスケ)」の語りで展開する。作中の「十三年前」は、昭和三十年代末頃<sup>(2)</sup>かと推測され、現在時間は、それから十三年後の昭和五十二年頃かと思われる。舞台としては、前者は大阪を、後者は京都を中心とする。

作品で描かれるのは、「過去」・「現在」の「私」と二つの恋愛(ランドウと女子高校生・「私」と洋子の恋愛)である。だが、酒井

英行氏の言うように「作品世界を統括する現在の『私』の人物像の掘り下げは浅く、現在の『私』には奥行きが欠けている」ために、洋子との物語は「三十歳前後の男女の直向きな情熱のない打算的な関係として、それほど深い掘り下げがあるわけではない」<sup>(3)</sup>。事実、一・三章の「私」とその恋愛（不倫）の描写には不足感がある。そして、ランドウの恋愛も、「深い掘り下げ」があるとも言い難い。

作中で印象的なものは、大阪の鶴町を舞台とする「辺境」の描写や、二つの恋の物語に登場する（こうもり）である。それらが作品の雰囲気―不安や不気味さ―を形成している。だが、前者の「辺境の街」と両場面に登場する（こうもり）の描写は、主人公たちの恋愛や作品を印象的にする効果はあるものの、作品を一つの雰囲気に染めているのではないか。

安藤始氏はこの作品を、「心の奥深くに棲む捉えがたい何かを描きだそうと」しており、「それは人の持つ本質であると共に、人それぞれの持つ宿命に由来する特質でもある。彼らは、その宿命から逃れようとしているかのようにでありながら、その自らの持つ特質に生き、そして生きる糧として<sup>(4)</sup>いる」とする。「心の奥深くに棲む捉えがたい何かを描きだそうと」しているのは、その通りだしとしても、この作品に登場する人物たちに宿命と呼ぶべきものがあろうか。そして彼らは「自らの持つ特質に生き」、「生きる糧としてい」だろうか。

この作品は何を描いているのか。また、作品の特徴は何かを考察する。

## 二 ランドウの死と「私」

作品は「晩秋の日曜日」、洋子と京都に行こうとしていた「私」が、大阪駅で高校の同級生・松岡から、ランドウの死を知らされる場面から始まる。

ランドウが死んで、もう五年も経ったことを、私は、大阪駅の雑踏でばったり再会した松岡に教えられた。 (一)

「どこかで見たことのある男とすれちが」い、高校の同級生だった松岡だと分かる。彼は「わたし」に「コンスケ」と呼びかける。（このあだ名はランドウが付け、ランドウのグループ内でのみ通用していた。）

挨拶を交わした後、松岡は「急に思いついたように、こう言っ

た。」  
「ランドウ、死んだぞオ」「……死んだ？」「もう、五年になるがな」

私が次に何か言おうとしたとき、松岡は大きな八重歯をのぞかせて笑い、「おまえ、あいかわらずやなア」と言った。そして、またなと大声をあげて会釈すると、足早に去って行った。

「私」はランドウの死を知り、彼の「濃い眉と鷺鼻が、じわじわ心の底からにじみあがってきて」、「哀しい気分になってしまった。」高校中退後、ヤクザの組織に入ったランドウは事故死ではなく、「きつと何かの病気で死んだのに違いない」と、「わたし」は思う。そして、彼の「屈強そうな体躯や顔つきに漂っていた、一種の影の薄さとも言えるもの」に「思いをめぐらせ」る。

「私」は高校時代、自分を「ごく普通の生徒」(二)だと思っていたが、ランドウに目を掛けられ、ある意味頼りにされていた。それは好きな娘に会いに、「私」と鶴町に行ったことや、「コンスケは、相当なもんやで」(二)というランドウの言葉からも分かる。この「コンスケは、相当なもんやで」や、松岡の言った「おまえ、あいかわらずやなア」は、「私」の持つ強さ(冷たさ)を指すのではないか。例えば「私」は、ランドウと別れて、そんなに彼のことを考えたことがなかったようである。(現在の洋子との不倫でも、「私」には罪悪感はなく、したたかさがある。)

以上のように一章の前半で、「私」はランドウの死を知り、後半は洋子との京都への道行きが描かれる。そこでは、情事に心動かしっている洋子の外見―「てかてかと濡れた口紅のまわり、透明のうぶ毛が光っている。いつもより強くたちこめてくる化粧の匂いの中に、洋子の生な体臭もあった」(一)―が描かれる。そして、それに「私」も性的に反応していく。

京都のタクシーの場面では、欲望に駆られた「私」には「洋子の裸身がすでに眼前にあぶり出ていた」し、洋子もそれを察知し、情事を望んでいる。ランドウの死を聞いたときの「私」の「哀しい気

分」は消え、欲望が前面に出てくるように、死と情欲の入れ替わりがある。これは、かつてのランドウと女子高生との恋愛の状況を想起させるし、洋子との不倫は、ランドウと女子高生の後日の姿を暗示しているのかもしれない。

### 三 ランドウとの冒険

二章で、高校時代のランドウが説明される。彼は「ケンカが強く、素行に問題があった」が、「級友たちからは不思議に好かれていた。」それは彼に「野卑な脂臭さもなかったし、弱い者いじめもなかった」からである。だが、彼のケンカは「血なまぐさ」いものであり、「ちゃんと計算され」た狡さがあった。

そんなランドウは、「なぜか私に好意をもっていた」。「私」は不思議に思いながらも、「そんなランドウの態度に、決して不快なものを感じなかった。」が、「だからといって、そのお返しのように私の方から親しみを示していくことは一度もなかった。」それは「私」が彼に「自分とは全く異質なものを、ランドウの冷たい、それでいて決してするどいとはいえない妙な虚ろさを宿す目付から感じ取っていた」からである。ランドウには冷たさとともに、孤独(虚しさ)がある。しかし、前述したように、「自分とは全く異質なもの」と言いながらも、「私」にも彼と同じ「冷たさと虚ろさ」があるのではないか。例えば、「私」が鶴町での冒険の最後に、ランドウ手製のドスで彼の鞆を切り刻む。そこには「私」の内部の衝動―ランドウへの、そして彼の恋愛へのいらだちや性的欲求など―とも

に、普通の高校生にはない「異質さ」(冷たさと虚しさ)があらう。(ランドウが私に好意を示したり、「相当なものやで」と言うことや、作品最終部で「私」の体内からこうもりが噴出するのは、それを示している。)

ランドウとの冒険は、九月のある「暑い土曜日」の昼過ぎから始まる。

昼までの授業が終り、私は仲間たちと国電の駅まで行き、わいわい騒ぎながら電車を待つていた。するとホームの端に固まっている学生たちの中から、ランドウがひとり抜け出て来て、私を手招きした。

「きょう、俺につき合えへんか?」「つき合うて、どこに行くんや?」

(二)

彼は一枚の写真を定期入れから出して、「私」に見せる。それは同じ歳頃の娘―「目鼻立ちがくつきり」として「実物はもつとはなやかな面立ち」を思わせる少女―の写真であった。女ともだちのいない「私」は「とてもうらやまし」く、写真を「長い間、眺めいて」た。ランドウは「真剣な表情」で「きょう、この娘に逢いに行きたいんや。一緒に来てくれよ」と頼む。彼女の住む鶴町を「私」も知らないが、結局はランドウの頼みを引き受ける。

ランドウと一緒になぜ行ったのかは、「いまも私には判らない」。「ランドウに対する、得体の知れない好意」や「写真に写っている美しい娘に対する興味」以外にも、「十七歳の私の、あのむせかえ

る残暑の中から不意に湧いてきた衝動だったのかも知れない」。ただ、この衝動は狭い意味の性欲だけではない。後にランドウの「俺がすんだら、コンスケもさしてもらえ」というセリフに対して、「前に行くランドウのがつちりしたうしろ姿が、何か恐ろしいものに見えてきた」や、「俺は、そんなことせえへんぞオ。ランドウだけがやったらええ。」との言葉からも分かる。「私」には、未知なもの(性)への興味と恐れ、そして良識があらう。

大淀区に住む「私」と尼崎在住のランドウは、鶴町を知らない。二人は、大阪駅のバスターミナルで鶴町行きのバスに乗り、「大阪の西端を南に下つていった」。「私」は、「汚ない場末の街にひきずり込まれていくような気がして、だんだん帰りたくなった」が、「もうとことんランドウにつき合うしか仕方がないにも思えていた」し、「いやな予感も心のどこかにあった」。「いやな予感」とはランドウが娘と逢い、そこで起きるかもしれない出来事への不安、ひよつとすると犯罪の匂いを嗅いだのかもしれない。

二人はバスの終点の大運橋で降り、バラックと工場の間を歩いて行く。そこは「気色悪い街・ゴーストタウン」であり、太陽はざらざらしていて、路地には犬の屍骸がころがっていた。「ランドウも私も、顔を見合せてあとずさりした。」しかも、「断続的にクレーシンの大きな音が響いて」、「周囲の底知れぬ静謐をさらに強めて」いて、「奇妙な静けさが街全体を覆っている」。これは現実的な描写と言うよりも、未知なる「辺境」や不安な二人の雰囲気盛り上げるものだろう。この土地の異常さ(またそう感じる心情)は、そこに住む娘や彼女への思いに影響している。

「私」はランドウに「あの娘に逢うて、それからどないするねん」と聞く。ランドウは「かすかなとまどい」を示し、「あれをしたいんや」と言う。「無理矢理にか？」との質問に、「阿呆、俺がそんなことするかいな。ふたりきりにさえなれたら、その気にさせてしまふんや、まかせとけよ」と答える<sup>(5)</sup>。どうやらランドウは彼女と深い仲ではなく、これから口説こうとしている。「歓楽街に入りびたっている」割りには、彼にはうぶなところがある。彼も性への恐れがあるようで、不安の中にいる。

「私はランドウの青ざめた顔を驚いて見やった」。彼は「血の気が引いて、心なしか目も吊りあがって」いて、「目はねつとりとかすんでさえた」。「私」はランドウの「本気」さと同時に、彼の恐怖心を感じる。この状態は、普通の恋する高校生とは違う。彼は何を恐れていたのか。恋の不成就への不安か、性（あれ）への不安か、「私」には分からない。

いずれにしても「寂しい街の片隅」を、二人は「汗まみれになりながら歩」き、「遠い辺境の街をさまよっている不安が、私を包み込んでいた」。「私」は「不安」の中にいる。ランドウも前述の「青ざめた顔」云々から、似たような不安を持ちつつも、娘への恋心や性欲で歩いていよう。未知なる辺境を進む不安な冒険者として、「私」たちはある。

二人は空腹を感じ、偶然出会った屋台でラーメンを食べる。「熱いラーメンで、私たちは汗みずくにな」る。空腹を満たした「私」は、「民家の密集している彼方」は何かと店主に尋ねると、男は無愛想に「堤防の向こうは海や。油だらけの、きたない海」だと答え

る。この堤防の向こう（汚い海）が、ランドウの恋の舞台となる。

#### 四 ランドウとこうもり

屋台の男から娘の家を教えてもらい、目ざす相手の家にたどり着く。

その堤防に近い家並の一角に、娘の家はあった。屋根の瓦は何枚もはがれていて、全体が心なしかひしゃげているような、くすんだ貧しい家で、二階の物干しに吊るされた洗濯物の中に、派手な女の下着が数枚揺れていた。

(二)

娘の家を見て、二人の幻想（辺境意識）は現実に戻ったろうが、「屋根の瓦は何枚もはがれていて、全体が心なしかひしゃげているような、くすんだ貧しい家」と「派手な女の下着」の対比は印象的である。それは娘の二面性にも通じていよう。「辺境」と美しい女、貧しさと性などが連想される。

ランドウは鞆を私に預け、玄関を開ける。彼の声に出て来た娘は「当惑気味の表情」で、写真よりも「もつと可憐なものを持ってい」て、「私はどきまぎして」しまう。ランドウに紹介されて、「娘は笑った」が、「顔のどこかに、かすかなおびえと羞恥があ」った。彼女は普通的女子高校生の面も持っている。（作中からは、彼女がどういう女子高生かは、はっきりとは分からない。）

「ちょっと待っててくれ」とランドウは言い、二人は堤防の彼方

に消えてしまうが、堤防の上で娘のスカートが風にまくれあがり、彼女の「慌てて両手で押さえた仕草が、いつまでも心に残」る。彼女が男に慣れているのではなく、羞恥心のある女子高校生であり、その仕草はかえって「私」に性的なものを感ぜさせる。(そして、堤防の向こうは、前述したように「汚い海」が広がっている。)

「私」は帰ってこない二人を待ちつつ、ランドウの手製のドスで電柱を削っていた。この行動から、「私」のいらだちが読み取れる。

時間が経ち夕暮れになり、ランドウが突然現れる。「白い凍ったような顔をして、額に汗をか」き、「私」に「もうちょっと待っててくれ」と頼む。「不満そうにうなず」いた「私」を見て、ランドウは「小走りで堤防のところに戻り、いきおいよく飛び越えて、向こうに消え」る。ランドウの「表情は死人みだったが、身のこなしには、抑えきれない欲びを隠し持っていた」。普通の高校生の恋愛とは違う、ランドウの恋愛の特徴がここにある。死人のような表情と「欲び」の共存。後者はともかくとして、前者の「白い凍ったような顔」や「表情は死人みたい」は普通ではない。想像するに、それはランドウの性欲と共存するうぶさや弱さや、彼の「妙な虚ろさ」によるものだろう。いずれにしても、ランドウの恋愛には、「死」の影がある。

「私」は堤防の向こうの「ただっぽい汚れた暗い空」を見て、こうもりの乱舞を見る。(汚い町には汚い海と空が似合い、こうもりが飛び交う。汚い空とこうもりは似合うかもしれないが、一つのイメージに染め上げるマイナスもある。)

二人がひそんでいるであろうあたりの上空に、すさまじい数のこうもりが飛び交っていたのである。私は慄然たる思いで、いつまでもこうもりを見つめた。それは鈍く黯い目を持つ、鳥とも獣ともつかない生き物の、醜悪な踊りであり、汗と虚無にまぶされた官能の、無数の飛沫であり、奇怪な熱情にあやつられるそれらの精魂の、どうしようもないざわめきであった。(二)

「二人がひそんでいる」上空に「すさまじい数のこうもりが飛び交」うなど、明るい恋愛のイメージとは違い、ランドウと彼女との暗い恋愛を暗示している。が、「醜悪な踊り」や「汗と虚無にまぶされた官能の、無数の飛沫」・「奇怪な熱情にあやつられるそれらの精魂」などと表現されると、誇張気味の表現だと言わざるを得ない。「私」はこうもりに「慄然たる思い」を持つが、ランドウたちの恋愛に明るさはないにしても、本来そこまでの奇怪さはないだろう。「辺境」での性欲に満ちた、そして、死の影のある恋愛として、不気味な(こうもり)のイメージで印象づけたのかもしれないが、そこまでの点については、「私」と洋子との関係や最終場面の落ち葉との関係でも考える。(一)

こうもりの群れに煽られた「私」は、ドスでランドウの袍を「何度も何度も切り刻み、それから手に持ったドスを堤防の向こうめがけて放り投げ」る。「私」の感情の暴発であり、ランドウの恋愛やこうもりの乱舞が、「私」の内なる衝動を呼び起こしたのである。いわば、「私」の「ランドウ殺し」である。そして、「私」は「露地を走り抜け、大運橋へと駆けた。バスに乗り、大阪駅に出て、そこ



から歩いて家に帰った。」

その後、ランドウは「学校にあらわれ」ず、退学してしまう。「私」は「それから一度もランドウに逢っていない。」彼の噂は耳にしたが、「それから死に至るまで、どんな道を歩いたのか知らない」し、同様に、鶴町の彼女のこともしらない。普通であれば、彼らへの思いを引きずるだろう。ここに、「私」の無関心さ（したたかさ）があり、「私」とランドウ（そして女子高校生）との関係の弱さがある。

だが、松岡の知らせ（ランドウの死）や洋子との不倫によって、十三年前の出来事は、内なるコウモリの乱舞としてよみがえる。

## 五 洋子との情事とこうもり

三章はまた現在に戻り、洋子との情事後の描写から始まる。

洋子は横座りになって、青い蜜柑をむいていた。私はその膝を枕に寝そべった。そうやって、スカートの奥に手を滑り込ませた。洋子はしたいようにさせていた。

(三)

洋子は二十九歳で、「私」との不倫は二年になる。彼女は「七代も続いた昆布屋の娘」(一)で、日ごろは「自分の意志をきっぱりと表情で示す女」であるが、情事に関しては「あいまいさ」を持つ。元々、京都に行くというのは彼女の情事の誘いであり、そういう時、彼女の「白目の部分は、いつも青味がかっている」よう

に、彼女は「私」との情事を欲している。

「私」が洋子にランドウの死を語ると、戸外でのざわめきが私に押し寄せる。

それは風であつたり、葉揺れであつたり、誰かの落葉を踏みしだく音であつたりする。誰も寝ていないのに、部屋のどこから、寝息に似た音が聞こえてくるときもある。洋子が平静に戻ると、それはいつそう強まってくるのである。

(二)

この不可解なざわめきは、性や(こうもり)とも関連しており、ランドウが帯びていた「死」とも近い。

「何の病気で死んだんかなア」

堤防を乗り越え、一度私の傍らに戻って来たときの、ランドウの姿態が、心をよぎった。暗い鉄さび色の空と、無数のこうもりが、私の心の奥にうごめいていた。

(二)

過去の「ランドウの姿態」が「私」の心をよぎり、暗い空を飛ぶ無数の(こうもり)が、「私の心の奥」でうごめく。同じような「うごめき」は、情事の対象である女性たちにも当てはまる。

例えば、ランドウの彼女の「おびえているような、羞恥を押し包んでいるような娘の表情は、京都へ行きたいとねだるとき、洋子の顔つきと共通」している。そこには、性(または男)へのおびえと、快楽への期待がある。洋子にも娘にも、羞恥とともに快楽への

欲望がある。

(三)

「まだ、俺とは、別れられへんやろ？」

そんな私の傲岸な言いぐさに、洋子は素直にうなずいた。

「……うん、もう辛抱でけへんと思う」

(三)

洋子にとって、「私」との別れは「辛抱でけへん」ものである。

洋子は「私」との情事に快感を得ている。彼女は「私」の愛情の薄さを認めた上で、「私」との不倫に満足している。対して、妻子持ちの「私」には、不倫による苦悩も罪悪感もない。そういう点で「私」はしたたかであるが、「私」と洋子の今後は、作品のラストシーンに暗示される。

その後、洋子の要望で旅館を出て、詩仙堂に行き、「私」は門前で彼女の帰りを待っていた。が、観覧時間が過ぎても帰ってこない彼女を不審に思い、「私」は「薄闇にどんより浮かびあがった土壁の向こうをうかがう」。

落葉が、暮色の中で激しく舞っていた。風は詩仙堂の庭でうねっているらしく、幾ひらもの葉っぱが地面に落ちないまま、右に左に、上に下にと舞っていた。私は長い間、その落葉の黯い交錯を見ていた。晩秋の、夕暮に飛び交う落葉は、十何年前の、こうもりそのものであった。静まりかえっていた私の体の中から、クレーンの音が響き、めまぐるしく、それでいてなやなよともつれあうようにして、こうもりたちが噴き出てきた。

「私」は十三年前——ランボウとの鶴町での冒険——の状態に帰っていく。当時との違いは、上空に見たこうもりが落ち葉であり、「私の体の中」から噴き出てくることである。即ち、現実のこうもりと幻想の（こうもり）との違いである。幻想の中で、過去・現在は一致する。

このときの（こうもり）は、何を象徴しているのか。人間の罪や悪だろうか。欲望や性欲だろうか。いずれにしても、それは美しいものではない。

過去の恋愛の冒険者・ランドウは五年前に死んだ。彼との思い出は、彼の死やかつての、そして現在の（こうもり）の乱舞により、暗く印象づけられる。過去の事実が十数年後に再現し、現在の「私」に影響を与える。辺境の地（鶴町）での「不安」は、詩仙堂でのそれとシンクロしている。

本来、性は生に通じるものだが、ランドウと「私」の場合、性は不安や恐怖、そして死と通じているようだ。女たちは男の性（欲望）の対象であるが、男たちには恋愛の欲びよりも不安の方が濃い。彼らは、性（女）を通じて死を呼び寄せているのかもしれない。

作品「こうもり」の暗さは、〈鶴町〉の迷宮性とともに、〈こうもり〉の持つ不気味さや嫌悪感によつて盛り上げられている。また、前述したように、女たちには羞恥心やおびえとともに、性（快楽）への期待がある。そして、作品には性と死の近さも描かれ、特に、



男たちは、性と死の共存に戦っているようでもある。

## 六 ま と め

宮本輝の小説では、〈こうもり〉のように、生き物がシンボルとしてうまく使われている。例えば、「螢川」には螢の乱舞する描写がある。作品最終部で、主人公の恋人の英子は、螢の大群によって妖しく美しく輝く。螢の交尾は死と近接しているが、それは美しい性の乱舞でもある。「こうもり」の「私」は、ランドウと彼女の上空で乱舞するこうもりを見て煽られ、最終場面では「落葉の黯い交錯」をきっかけに、身体からこうもりを噴き出す。

だが、ここまで暗いイメージを、作品に植え付ける必要があるだろうか。高校生のデートや中年男たちの不倫に暗さや醜さはあるとしても、〈こうもり〉の乱舞に象徴される、罪や死のイメージと結びつける必然さやその効果が分かりにくい。少なくとも「私」の内部に〈こうもり〉が存在しているというのは、印象的であるとしても、そこまでの暗さ・重さを持つ人間として「私」は造型されていようか。「宿命」と呼ぶべき重みは、「私」にはないだろう。（洋子との不倫もそうだが、ランドウと女子高校生の恋愛にしても、「宿命」レベルのものとは言い難い。）また、死に対しての主人公たちの姿勢も弱い。「私」が京都で感じる死者の「ざわめき」は注目に値するし、その象徴が、落ち葉（こうもり）に触発された、内なる〈こうもり〉の登場だとしても、どれほどの力を持っているようか。

対して例えば「幻の光」では、能登の海の光のさざなみに死が待

ち構えていて、主人公のゆみ子はそれをうっとり眺め、死を幻想し一体化する。この幻想の強さと持続力は、「幻の光」の独自性であり、「こうもり」はこういった面では弱い。ランドウが、〈こうもり〉によって死んだのならともかく、また、「私」と洋子の不倫が重いものを感じられない以上、死が重みを持っていないし、生と死が拮抗する「宿命」レベルまで、作品が掘り下げられていない。

情景―〈辺境・鶴町〉や〈こうもり〉の乱舞―やランドウと「私」の道行きに、印象的な描写や造型があるにしても、螢（螢川）と〈こうもり〉のイメージの違いや、愛する死者の幻想を見続ける主人公（「幻の光」のゆみ子）の情念の深さ、そして、人間（恋愛）関係の深淺などを考えると、「こうもり」の特徴や弱さが分かる。

### （注）

- （1）「ランドウ」という名前（また、カタカナ表記）は、当時としては日本人離れしている。彼の鶴町の冒険や恋愛に、西洋風の雰囲気を感じたいのかもしれない。少なくとも、「ランドウ」という名前は、彼の特質を象徴しているよう。
- （2）作中に鶴町近辺の市電の記述があるが、該当の市電は昭和四十年に廃止された。そこから、この作品の回想時期は、昭和三十九年までのものと考えられよう。
- （3）酒井英行『宮本輝論』（翰林書房 1998・9）
- （4）安藤始『宿命と永遠―宮本輝の物語―』（おうふう 2003・10）
- （5）この場面では、酒井氏の言うように、二人が互いに「青い、『焼けつくような』情欲を嗅ぎ取りあっていた」面はあるかもしれないが、「私」の場合、情欲はそこまでは強くないだろう。
- （6）酒井英行『宮本輝論』（翰林書房 1998・9）
- （6）この点は、例えば「錦繡」の有馬と由加子の恋愛を想起すれば、違

いが分かりやすい。由加子は自分と有馬の死を、無理心中によって実行しようとする。それほど彼女は有馬を愛していたのだし、独占欲や孤独感も強かった。また、有馬は由加子の死に対して、強い喪失感を持ち、彼の中で彼女は生き続けている。

〔二〇一四・九・二五 受理〕